

書評 *Тэцуо Мотидзуки. Микрокосмы Достоевского. Дальний Восток, близкая Россия. Вып. 7. Белград: Графичар, 2025. 166 с.*

野中 進

本書は、わが国のドストエフスキー(Федор Михайлович Достоевский, 1821-1881)研究をリードしてきた一人、望月哲男のロシア語によるモノグラフィーである。¹ 彼の業績としては、現代ロシア文学の研究と翻訳、また、レフ・トルストイ(Лев Николаевич Толстой, 1828-1910)の二大長編の名訳も広く知られている。² だが、本書は純粋なドストエフスキー研究であり、望月のロシア文学研究の中核的要素を凝縮したものと言える。世界のドストエフスキー研究界でいわば日本代表のような立場を長年引き受けてきた望月が、自らの論考の選りすぐりを一冊のロシア語の本にまとめたことは、日本のロシア文学研究界のみならず世界のドストエフスキー研究界にとっても慶賀すべき快挙である。³

本書の題名は『ドストエフスキーの小宇宙』である。望月自身認めるように、各章はドストエフスキーの作品全体の解明というより「個々の部分や具体的要素の意味と役割の検討」⁴ に向けられている。「主に議論は、いわば小宇宙の中で行われている。だが筆者としては、全体は部分に宿ると言いたい」(7)という一文に望月の信念が表れている。彼の言う「小宇宙」には、ドストエフスキー作品の各部分・要素だけでなく、研究者・批評家・読者たちの読解という無数の小宇宙も含まれていることは、本書を読み始めるとすぐに気がつくことである。

本書は二部構成であり、それぞれ 4 章から成っている。第 1 部をなす 4 章はそれぞれ『白痴』(Идиот, 1868)、『永遠の夫』(Вечный муж, 1870)、『未成年』(Подросток, 1875)、『おとなしい女』(Кроткая, 1876)を扱っている。第 2 部は『カラマゾフの兄弟』(Братья Карамазовы, 1880)を扱った 3 章、そして『白痴』と『死の家の記録』(Записки из Мертвого дома, 1862)を論じた最終章から成る。つまり、分析対象としては『カラマゾフの兄弟』が、少なくとも量的には、特別な重みを持っている。他方、主題的には、第 1 部は「時間」が共通テーマであり、第 2 部のそれは「他者」であるように評者には思われた。これが本書の特徴づけとして適切かどうか、以下、各章の内容を紹介しながら、読者とともに考えてみたい。

¹ 本書は電子版でも入手可能である([<https://www.dsjn.jp/dsjbooks/index.html>] 2025 年 8 月 20 日現在有効)。

² レフ・トルストイ／望月哲男訳『アンナ・カレーニナ』(全 4 冊)光文社古典文庫、2008 年；レフ・トルストイ／望月哲男訳『戦争と平和』(全 6 冊)光文社古典文庫、2020 年。なお、『復活』訳も近刊予定とのことである。

³ 本書の出版は日本ドストエフスキー協会の HP([<https://www.dsjn.jp/news/event-65975-37852-61989-85955-46426-32347/>] 2025 年 8 月 20 日現在有効)および国際ドストエフスキー協会の HP([<https://dostoevsky.org/2025/06/10/>] 2025 年 8 月 20 日現在有効)でも紹介された。

⁴ *Тэцуо Мотидзуки. Микрокосмы Достоевского. Дальний Восток, близкая Россия. Вып. 7. Белград: Графичар, 2025. С. 7.* 以下、本書からの引用ページは書評本文中、()内に示す。

第1章「限定と無限のパラドクス: ムイシキンの時間」は、『白痴』の時間論である。言うまでもなく、この主題に関してはじつに多くの論考があるが、望月は日露欧米にわたって丁寧に当たっている。その作業を踏まえて彼が探査する小宇宙は、作品冒頭、ムイシキンが語る死刑囚の最後の5分、あるいは刑場までの最後の数百メートルの物語である。そこにどんな特徴があるのだろうか。望月が着目するのは時間の分割の操作、そしてそれによって生じる、ごく短い時間が永遠のように生きられるという逆説である。死刑囚は「5 分後」という終焉に到着しないよう、時間や距離を際限なく分割し、無限の虚像に逃げ込もうとする。この死刑囚の状況を、望月はゼノンのパラドクス群と対比する。たとえば「二分割のパラドクス」は、「ある場所に到達するにはその半分の地点に到達しなくてはならない。そこに到達したとしてもそこから目標までの半分の地点に到達しなくてはならない。このように無限の点を通り抜けることは不可能だが、有限の時間で通過するのは不可能だから、目標に到達できない⁵」というものである。たしかにこれは、最後の数百メートルを行く死刑囚の物語を連想させる。

だが、読者に感銘を与えるのは、望月の次の指摘だろう。「[評者注: 真の]パラドクスは、人間が不可避の終末を避け、死から首尾よく逃れることなく、いかなる思弁的操作にも関わらず、人間は簡単に部屋の端まで行きつくし、死刑囚は処刑されるだろうということである」(19)。実際、その通りなのだ。思弁の操作でどこまでも先延ばしにできたはずの終わりが、結局あっけなく来るといふことにこそ、人間にとっての真の驚きがある。死刑囚の物語はまさにそのことを語っているのだろう。

考えてみると、私たちの日常にもこの種の驚きがある。締切までまだ一週間ある...まだ週末が丸々残っている...今日、徹夜をすれば半日以上残っているでないか、と自分を安心させつつも、やっぱり締切は来る。この例が卑近すぎるなら、大切な人との別れを考えてみればよい。また会える、まだ会えると自分に言い聞かせても、やっぱり(そして突然のように)別れは来るのである。死刑や殺人など非日常的なエピソードに充ちたドストエフスキー文学が、それでも読者に強いリアリティを感じさせるのは、こうした深層の類比が働くからではないだろうか。望月の洞察に触発されて、こうした感想を抱いた。

第2章「模擬演劇としての『永遠の夫』」は、完成度という点で評価の高い『永遠の夫』を取り上げ、その形式的完成と裏腹のいくつかの謎めいた箇所(これが本章の小宇宙である)を読み解こうとする。⁶ まず、この中編についての代表的論考を丁寧に腑分けし、その上で、感情(愛情や嫉妬)と自己意識の模倣性・演劇性が本作品の中心的主題であると望月は見定める。ヴェリチャーニノフも、ト

⁵ 土屋賢二「ゼノンのパラドクス」、広松渉他編『岩波哲学・思想事典』岩波書店、1998年、947頁。

⁶ 第2章については、以下の報告資料も参照した。望月哲男「ドストエフスキーの小宇宙『永遠の夫』たちの世界」(2025年3月15日、ドストエフスキーシンポジウム「ドストエフスキーの小宇宙」)。

トルソツキーも「宙ぶらりん」の状態に苦しんでおり、自分を幕間の役者のごとく感じる。彼らはもう一度、ドンファンと「永遠の夫」の役を演じ直すことで、感情的、そして倫理的なカタルシスを経験する。レフ・ヴィゴツキー(Лев Семенович Выготский, 1896-1934)の『芸術心理学』(Психология искусства, 1925 執筆、1965 初版)に拠りつつ、望月は主人公たちの不思議な行動を説明する。人間は生理上、きわめて多くの刺激や印象を受容する一方、それを反応(表現、行動)に十分に転化することができないため、自らの経験を演じ直すことが必要になる。それがヴェリチャニーノフとトルソツキーの物語である。かつ、それは私たちの日々の生とも接続している。かつて経験したことを思い出し、解釈し直し、日記をつけ(今なら SNS か)、他人に語って聞かせ、芸術表現に昇華させる。こうした所作はすべて、ヴィゴツキー的に言えば、処理しきれなかった刺激や印象への反応を作り直すことなのだろう。ここにもまた、ドストエフスキー文学のリアリティの理由が見えるようだ。トルソツキーらの奇妙な行動は私たちの日々の所作と無縁ではないのである。望月のドストエフスキー論は、物語論やレトリック分析を援用しつつも、何よりもまず作品のリアリティの解明を動機としているように思われる。

第3章「恥とイデア:ドストエフスキーの『未成年』」は、この長編の語り手かつ主人公のアルカージーの2つの特徴—恥の感覚と「ロスチャイルド思想」(極度の吝嗇に徹して大金持ちになるという思想)—のつながりを論じている。そもそも、ドストエフスキー文学には恥辱を異常に強く感じる人物が多く登場する。恥の感覚に苦しむがゆえに、かえって奇矯な振舞いをしたり、恥知らずな嘘をついたりする。アルカージーの場合、嘘つきにも地下室人にもまだなっていないが、その予備軍というべき素質を持っている。複雑な出自、女性への両義的態度、そして手記を記すこと(これは「経験をたどり直す」という前章のテーマとつながっている)がアルカージーの恥の感覚を研ぎ澄ましている。

望月は『未成年』で使われる「恥」に関する語彙を6つのグループに分類し、それぞれ検討している。それらの語彙を用いて自分の生を語るアルカージーの「恥の感覚」の多面性も明らかになる。興味深いのは、第6のグループとして一連の固有名(人名)が挙げられることだ。オセロ、ダビデ、ヨブ、チャーツキーなど、たしかに「恥の感覚」に結びつけられる芸術作品の主人公たちがいる。彼らとつながることで、アルカージーの恥はインターテクスチュアルな意味合いも帯びている。

恥は現実の人間の間でも伝播する。父親の恥(恥辱)に苦しむ子供というのはドストエフスキーが幾度となく描いた主題だが、じつは子供の苦しみ方にも色々ある。そんな父親と争うか、批判的に乗り越えるか、あるいはけなげに愛し続けるかという三通りが『カラマーゾフの兄弟』では三人の兄弟によって形象化されたが、アルカージーの場合、これらが分化しないまま混じり合っているという指摘は興味深い。五大長編の最後の二作品、かつ評価や人気がかけ離れているこの二作品の関係は、今後も議論されてゆくだろう。

望月によれば、アルカージの形象の特徴は、「恥」と「アイデア(思想)」の結びつきである。アルカージだけでなく、ドストエフスキーの主人公では、その独特な(ときに異常な)思想がしばしば恥の感覚と結びついている。思想は彼らの恥を隠す半面、そこに恥が隠されていることを知らせてもいる。その意味で、思想は嘘に似た働きをしているとさえ、望月は言う。その一方、彼らの思想は恥にも似ていて、公にされるのを嫌がる。たしかに、アルカージがロスチャイルド思想について語るのには手記においてであり、それ以前に他人に明かそうとはしなかった。あるいは、イワン・カラマゾフが大審問官伝説を語って聞かせたのはアリョーシャが初めてではなかったろうか。ドストエフスキーの主人公たちがきわめて思想的であると同時に、彼らの思想が深く人格化されているのは「恥の現象学」が介在しているからだという望月の議論は説得的である。彼は「恥としての思想」(65)という定式にさえ達している。人間にとってアイデア(思想)とは何かと考えるとき、一考に値する指摘である。ここから、人間の成長とは何かという、ドストエフスキーがあまり正面から描かなかった主題も導かれるかもしれない。ドストエフスキーが長編の主人公につねに若者を選んだのはなぜかという素朴な疑問を評者は昔から持っているのだが、やはり作家は人間の成長というものを描きたかったのでないだろうか。

第4章「振り子はよそよそしい、嫌な音を立てている」:『おとなしい女』の時間』は、後期短編『おとなしい女』論だが、やはり「時間」からアプローチしている。とくに主人公の時間との関係が問題となる。望月はそれを「現在との不協和(диссонанс с настоящим временем)」(74)と名づける。実際、主人公の独白(それがこの短編のほぼ全てだが)自体、妻の死という現実と向き合うのを遅らせるための足掻きにほかならない。時間に対する彼の態度を、望月は8つの要素に分けて特徴づける。質草を取り、金を貸す。沈黙を偏愛する。計画とシステムに固執し、自らの生の原理とする。どこまでも決定を遅らせ、夢想と計画のうちに留まる。そうした所作から立ち上がるのは、「今という時」を他者と分かち合うことのできない夢想家＝地下室人の形象である。自分の人生が偶然に翻弄されていると彼が感じるのも、「今という時」に向き合えていないからである。

それでは、妻の死という現実から彼女との出会いにさかのぼって全てを語り直そうとする試みは彼に何をもたらすのだろうか。それは別の研究者の定式を借りれば、「時間との対話、あるいは決闘」(83)である。すでに分かっている結末に向かって一步一步測るように進む語り手は『白痴』の死刑囚に似ている。どんなに丁寧に語り直し、犀利に分析し、必死に弁明しても、かならず結末は来る。主人公は時間との決闘に負けたと言うべきだが、そこからしか彼の再生は始まらないというのも本当かもしれない。

この章をもって第1部が終わる。前述したように、本書の前半を貫く主題は、「ドストエフスキーにおける時間」だと言えるだろう。それは、一方では『白痴』の死刑囚や『おとなしい女』の語り手のように不可避の結末(=死)への到着を遅らせようとする個の意識の極端なモデル化である。その一方、

ロシアにおける「歴史の欠如」という近代後発国の問題系にも接続している。だからこそ、ドストエフスキー文学は個の意識の深奥を描いた文学としても、後発国に共通の文明問題を描いた文学としても読まれてきたのであり、その2つのレベルをつなぐのが「時間」の主題だというのが望月の主張だろう。究めがたい時間の中で、個の意識とロシアが会うのが「他者」であるということで、第2部に入っていくことになる。

第5章『カラマーゾフの兄弟』における決疑論のテーマは、第2部の主調音を定める重要な章である。決疑論(casuistica, казуистика)とは「倫理の一般的原則もしくは規範を個々の事例(casus)に適用することにかかわる倫理神学ないし倫理学の応用部門」⁷としてカトリック教会で発展したことで知られている。ドストエフスキーや同時代のロシア人にとっても、決疑論はカトリック西欧の虚偽、ないし浅薄さを代表するものの一つだった。だが同時に、ドストエフスキーは決疑論のうちに、有限な主観をもって無限(=神)に対峙しなければならない近代人の運命も見ていた。だからこそ、『カラマーゾフの兄弟』では「否定的」な決疑論者(スメルジャコフ、弁護士フェチュコーヴィチ)だけでなく、「肯定的(あるいは両義的)」な決疑論者(イワン、アリョーシャ)も登場するのだと望月は考える。イワンも彼の分身たる大審問官も、弱い有限な人間の立場から神に立ち向かうが、彼らの「反逆」の論理は決疑論的であり、自らの詭弁性を自覚している。それが、神や真理を求めつつ、あくまで人間主観に拠って自律的であろうとする近代人の陥穽に他ならない。この陥穽を避けるために『カラマーゾフの兄弟』で示されるのがゾシマの信仰と言葉である。彼にとって信仰とは、倫理的規則の実行でも教義に基づく説得でもなく、「人間の内にある神の言葉の種が、突如、明るい光のように感じられる経験」(103)に近い。ドストエフスキーはこうした信仰観によって、決疑論つまりは近代的人間観一に対抗する途を描こうとしたと、望月は見ている。

決疑論について稲垣良典はこう述べている。今日、先端的な科学・技術・医療・社会秩序などの急激な変化を前に「人々の良心は人類史上かつてなかった倫理的問題に関して選択を迫られている。名称の問題は別として、倫理の根本原則を重視しつつ、それらを良心の個別的事例に正しく適用することにかかわる決疑法の重要性はあきらかであるといえよう」。⁸ そうだとすると、純真なアリョーシャでさえいくらかは決疑論者たらざるをえないというドストエフスキーの慧眼は、現代にまで届いていると言えるだろう。

第6章「ドストエフスキーの小説におけるイエズス会士の影」は、『カラマーゾフの兄弟』におけるイエズス会士イメージについて論じている。ロシアにおけるイエズス会の足跡と文学的イメージの歴史、とりわけ作品の舞台である1860年代のイエズス会に関する言説史を、望月は綿密に追っている。それを読むと、近代ロシアの知識人たちにとってイエズス会がカトリック西欧を象徴する存在

⁷ 稲垣良典「決疑法」、広松他編『岩波哲学・思想事典』、433頁。

⁸ 同前、434頁。

だったことがよく分かる。しかも、それは「異質な他者」というより、近代化の道を遅れて歩むロシアの「内なる他者」、すなわち自己内対話に入り込み、「自己／他者」の安易な二項対立を妨害するような存在であった。イワンの描く大審問官の両義性は、近代ロシアにとってのイエズス会の両義性に通ずるのかもしれない。

イエズス会自体は 1820 年にロシアを追放されたにも関わらず、ドストエフスキーの時代に至るまで強い象徴性を保ったのにはいくつか理由があったようだ。中でも注目されるのはカトリックに改宗し、イエズス会士となったロシア人の存在である(モスクワ大学で教鞭をとったこともあるウラジーミル・ペチューリン(Владимир Сергеевич Печерин, 1807-1885)、イワン・ガガーリン公爵(Иван Сергеевич Гагарин, 1814-1882)、イワン・マルティノフ(Иван Михайлович Мартынов, 1821-1894)ら)。彼らの登場にはスラヴ派(イワン・アクサーコフ(Иван Сергеевич Аксаков, 1823-1886)、ユーリー・サマーリン(Юрий Федорович Самарин, 1819-1876)ら)のみならず、革命派(アレクサンドル・ゲルツェン(Александр Иванович Герцен, 1812-1870)、ニコライ・オガリョフ(Николай Платонович Огарев, 1813-1877)ら)も鋭く反応し、1850-1860 年代にはイエズス会とカトリックをめぐる論争が続いた。その間、練り上げられたイエズス会士イメージが『カラマーゾフの兄弟』にも流れ込んでいるという。

興味深いのは、この長編の第 2 部がもし書かれていたら、イエズス会モチーフはさらに重要な役割を帯びたのではないかという望月の推測である。ゾシマの命に従って実社会に出たであろうアリョーシャは、おそらくイエズス会士に会っただろう。もしかすると、それはイワンだったかもしれない。ふたたびまみえた兄弟のあいだで、正教会とカトリックの対話が繰り広げられたらという望月の「空想」は、彼の盟友亀山郁夫のそれにも匹敵する面白さである。⁹

第 7 章「包摂と排除:『カラマーゾフの兄弟』における教会裁判と古儀式派のテーマ」は、ゾシマの僧庵で教会裁判をめぐる交わされる議論を手がかりに、作家の思想的枠組の一つ—それを望月は「包摂と排除」と定式化する—を論じた章である。「包括と排除」の主題は、国家と教会の関係を巧みに(二重に読めるように)論じたイワンの論文に始まり、棄教者は罰されないというスメルジャコフの決疑論的詭弁、宗教的寛容を説くゾシマの言葉などに投影され、それぞれ独自な変容・発展を遂げている。

ドストエフスキーに限らず、19 世紀後半のロシア文学・思想で「包摂と排除」が重要だったのは、古儀式派をめぐる議論においてである。民衆や正教会を理解する上で古儀式派をどう捉えるかは、まさに「包括と排除」の問題だった。ドストエフスキーは「包摂」に傾いていた。つまり、古儀式派に真のロシア性を見出し、ロシア正教会の再統合を夢見た。そのビジョンは『無神論』(Атеизм, 1868-1869)や『偉大なる罪びとの一生』(Житие великого грешника, 1869-1870)の構想に直接的に示され

⁹ 亀山郁夫『『カラマーゾフの兄弟』続編を空想する』光文社新書、2007 年。

ている。また、『死の家の記録』や『罪と罰』(Преступление и наказание, 1867)などに古儀式派の民衆がしばしば書き込まれたことはよく知られている。『カラマーゾフの兄弟』の場合、ゾシマ長老の宗教的寛容さに「すべての東方キリスト教徒が将来、一つになるという希望」(『作家の日記』(Дневник писателя, 1873-1881)、1876年12月)が託されていると、望月は指摘する(140)。

だが望月は、ゾシマ長老の「包摂」が東方キリスト教の枠内にとどまっていることも指摘する。古儀式派を包摂し、他の正教会(セルビアやコンスタンチノーブル)と一つになるという壮大な希望は、その一方でカトリックやイスラム、ユダヤ教などの排除の問題の解決にはつながらない。ここに晩年のドストエフスキーの宗教観の広がりや狭さがある。『カラマーゾフの兄弟』冒頭の教会裁判をめぐるエピソードは、その両面性をミクロなレベルで表しているというのが望月の結論である。

第8章「謝罪と許しの形:アクーリカとナスターシャ・フィリッポヴナ(あとがきに代えて)」は、2023年8月、名古屋で開催された第18回国際ドストエフスキー学会で望月が行った基調講演を元に行っている。基調講演と言っても大上段に構えた内容ではなく、いかにも望月らしく、2021年に亡くなった米国の研究者デボラ・マルティンセン(Deborah Martinsen, 1954-2021)の『白痴』論へのオマージュというかたちを取っている。評者も講演会場にいたが、望月の心優しい意匠は聴衆に感銘を与えているように思われた。

「非寛容の悲劇(Tragedy of Unforgiveness)」という定式でマルティンセンが論じたのは、ナスターシャ・フィリッポヴナの形象をめぐる先鋭的に表された「他者を許すこと／他者に許されること」の問題である。彼女とムシキン、ロゴージンの三角関係(そしてその外側の「社会」との関係も)もこの観点から見直すことができる。望月の着想は、この問題を『死の家の記録』の第2部第4章「アクーリカの亭主」に適用するというものである。たしかに、一度読んだら忘れられないこの短い物語は「許すこと／許されること」の主題の小宇宙と呼ぶのにふさわしい。農民の娘としてもっとも大切な名誉をいわれなく汚されたアクーリカが家族の暴力と村社会の軽蔑を耐え忍び、最後の最後に許しを求めたフィリカに「あんたもあたしを許してね、おにいさん。私はあんたのことを、何も悪く思っちゃいないわ」¹⁰と応えるのは、「許しの日曜日(赦罪の主日)」などの正教会の伝統が反映されているとしても、明らかにそれ以上の衝撃を読者に与える。しかもアクーリカの内面が描かれないので読者にはいっそう謎めいて見える(その点、『おとなしい女』のヒロインの描写法に似ている)。

ドストエフスキーの専門家でない評者がうかつにも驚くのは、この短いエピソードについても既に多くの先行研究があることだ。先述の国際ドストエフスキー学会でも、高名なロシア人研究者が今では毎年あまりに多くのドストエフスキー論が書かれており、とても目を通しきれないと慨嘆していた。しかし、望月は数ある「アクーリカの亭主」論を丁寧に(かつ楽しそうに)読み解き、許しを

¹⁰ フョードル・ドストエフスキー／望月哲男訳『死の家の記録』光文社古典新訳文庫、2013年、485頁。

乞うフィリカ、許しを与えるアクーリカ、そしてその彼女を許せず殺してしまうシシコーフが織りなす三角関係の様々な性格づけを検討する。望月がとくに注目するのは、作家の「シベリア・ノート」を基に、アクーリカの運命と最後の言葉(声)に民衆歌(баллада)の反映を見たセシリヤ・ディルワース(Cecillia Dilworth)の論である。シベリアでドストエフスキーが採取したバラードにはアクーリカのように理不尽な目に合う若い娘を歌ったものが少なくないという。いわばアクーリカは民衆歌のジャンルから生れ出たヒロインであり、個人的と言うより集合的な形象である。ここにナスターシャ・フィリップヴナとの本質的な違いが見て取れる。たしかにナスターシャ・フィリップヴナの形象も、マグダラのマリアやスイスのマリーらの物語に半ば根ざしているとは言え、最終的には個の形象として立ち上がっている。ジャンルや思想が指示する定型性に収まりきらない、自己完結しない矛盾する声を発する個の形象としての主人公たちを創造しえたところにドストエフスキーの偉大さ(という言葉を使っても許されるだろう)がある。「許す／許される」の関係性は「語りかける／語りかけられる」のそれに変換されたのかもしれない。望月はミハイル・バフチン(Михаил Михайлович Бахтин, 1895-1975)への言及を控え目にしているが、本章ではポリフォニー論が強く意識されているように感じる。何しろ、彼は日本の読者に『ドストエフスキーの詩学』(Проблемы поэтики Достоевского, 1963)のすぐれた翻訳をもたらした一人なのだから、それも自然なことだろう。¹¹

最後に、本書全体をふり返ろう。最初に述べたように、第1部の主要テーマは「時間」、第2部のそれは「他者」であるとまとめられるように思われる。死刑囚の時間(『白痴』)、かつての経験の再演(『永遠の夫』)、恥としての思想と人間の成長(『未成年』)、始まりへの立ち返りによる終わりの忌避(『おとなしい女』)などの議論は、いずれも時間の問題に根ざしている。他方、決疑論やイエズス会などカトリック西欧の象徴的存在が自分(ロシア)の中にもあるという洞察、古儀式派やカトリックに対する「包摂と排除」の問題(『カラマーゾフの兄弟』)、許しと非寛容をめぐる民衆の集合的象(『死の家の記録』)などは、自己と他者の問題に関わる。

評者の考えでは、この2つの方向性は望月のドストエフスキー読解に独特な趣を与えている。言うなれば、それは現象学的な読解である。もちろん、評者の言う「現象学的」とは厳密に哲学的な用語ではない。だが、望月の読みはドストエフスキー作品における「意味の立ち上がり」を記述しようとしているという意味であれば、あながち見当違いの形容でもないだろう。望月のいう「小宇宙」とは作品の構造的単位でなく、意味の立ち上がりが観取される最小単位を指すのだろう。「全体は部分に宿る」(7)という望月の信念もそのような意味で理解すべきだと思われる。

おそらく望月の理解では、ドストエフスキー作品の部分、ないし小宇宙に立ち上がる意味は、揺らぎや複数性、更新を含んでおり、他の読解との対話にも開かれている。望月が丹念に先行研究を

¹¹ ミハイル・バフチン／望月哲男・鈴木淳一訳『ドストエフスキーの詩学』ちくま学芸文庫、1995年。

参照するのは、厳格な学問的手続きというにとどまらず、意味の根源的対話性を記述するためだろう。実際、彼は本書の最後で述べている。「私にとって文学作品の読解とは、様々な読者と研究者との対話に他ならない」(159)。これは謙遜でも感慨でもなく、己れの方法論の開示である。

もう一つ、評者が述べておきたいのは、望月のドストエフスキー論の深化によって『死の家の記録』の訳出¹²が少なからぬ意味を持ったのでないかという推測である。「アクーリカの亭主」を論じた第8章は言うまでもないが、本書全体の議論が『死の家の記録』とくに呼応しているように思われた。今回、望月訳を読み直して気づいたのだが、「最初の印象」、「最初の印象(続)」、「最初の印象(続々)」、「最初の一月」という一見芸のない章題も、囚人にとっての時間という主題をよく表している。また、次のいくつかの文章も、望月の議論との符合が印象的である。「ペトローフはもう二度ほど私のところに駆け込んできた。彼は一日中ほんのちょっぴりしか酒を口にせず、ほぼ完全に素面を通した。ただそうして最後の一時間までじっと何かを待ち受けていた。きっと何かが起こるだろう、何かしら並外れた、祝日らしい、わくわくするようなことが起こるはずだと、じっと待ち受けていた」¹³「そしてそのとき私の心は何という希望に高鳴ったことか！ 私は考え、決断し、そして誓った—自分の今後の人生においては、かつて犯したような失敗も、墮落も、もはや二度と繰り返すまいと。自分の全未来の予定表を書き、厳しくそれを守ろうと決めた」¹⁴「[評者注:ポーランド人 M の]他人とつきあう際の極度な、幾分イエズス会士を思わせるような巧妙さと慎重さは、胸のうちに秘めた深い懷疑を物語っていたのであった。そしてこの懷疑と、自分の持つある種の特別な信条および希望への深い、確固とした信念との二重性のおかげで、本人が一番苦しんでいたのである」¹⁵これらの文章は『白痴』や『未成年』、『カラマーゾフの兄弟』で読んだとしても、何ら違和感がないだろう。もちろん、このような感想を抱くこと自体、望月の著作の影響である。だが、望月にとって『死の家の記録』の翻訳が、彼のドストエフスキー論の結晶化の一つのきっかけになったのではないか、という推測も捨てきれない。

本書について、あえてないものねだりを言えば、「ドストエフスキーとトルストイ」の章が読みたかった気はする。望月はトルストイの二大長編の翻訳者であるからなおのことである。本書ではドストエフスキー作品のミクロな意味の立ち上がりの記述に徹したわけだが、当然、望月には望月なりの「ドストエフスキーとトルストイ」論があるはずだろう。

その関連で言えば、望月は現代ロシア文学の研究・紹介でも大きな貢献をなした。北海道大学のスラブ・ユーラシア研究センターを拠点にロシアの作家、欧米の研究者、日本の若手研究者らを呼

¹² フョードル・ドストエフスキー／望月哲男訳『死の家の記録』光文社古典新訳文庫、2013年。

¹³ 同前、310頁。

¹⁴ 同前、621頁。

¹⁵ 同前、591頁。

び寄せ、交流の機会を設け、越野剛や松下降志らの後進を育てた。ドストエフスキーと現代文学というテーマにも取り組んだ。¹⁶ そうだとすれば、望月は『ドストエフスキーのマクロコスモス』という本も書けるのでないかという気がする。

最後は勝手な注文となったが、いずれにしても、本書が日本のロシア文学界、世界のドストエフスキー研究界で心から歓迎され、重要な著作、一つの小宇宙と見なされるようになることは疑いないだろう。

(のなか すすむ)

¹⁶ 望月哲男『ドストエフスキー・カフェ:現代ロシアの文学風景』東洋書店、2005年。